

第1日 送りがない・返り点

解答

- ① (1) 但見涙痕濕。(2) 輕舟已過萬重山。  
 (3) 疑 是地上霜。
- ② (1) ③②①④ (2) ⑤①④②③⑥  
 (3) ⑤③①②④ (4) ⑧④③①②⑦⑤⑥  
 (5) ④①③② (6) ⑥③①②⑤④  
 (7) ②③①④ (8) ⑦④②①③⑥⑤  
 (9) ⑥①⑤④②③
- ③ (1) ②①④③ (2) ④③②①  
 (3) ②①⑤③④ (4) ④②①③  
 (5) ①⑧②⑤③④⑥⑦  
 (6) ⑤②③①④  
 (7) ⑥①⑤②④③
- ④ (1) 少年易老學難成。  
 (2) 有陰德者必有陽報。  
 (3) 不入虎穴不得虎子。  
 (4) 他山之石可以攻玉。  
 (5) 士不可不弘毅。  
 (6) 桃李不言，下自成蹊。  
 (7) 一編一詠膾炙人口。  
 (8) 不知其能千里食上也。  
 (9) 瓜田不納履，李下不正履。  
 (10) 孤極知燕小，不足以為報。

世俗の其の意を察せずして猥りに朱家郭解等を以て暴豪の徒と類を同じくせしめ、共に之を笑ふを悲しむ者有り。

世間の人々が彼らの本意もわからず、朱家や郭解たちを横暴な徒党の一味と同類だとみなし、みんな冷笑していることを悲しく思うのだ。

解答の解説

- ① (1)「ふ」と見ると、涙の痕が濡れたまま。(李白の詩「怨情」)  
 (2)「スピードのある小舟はもう通り過ぎてしまった。幾重にも重なる山のあたりを。」(李白の詩「早發白帝城」(早に白帝城を發す朝早く白帝城を出發する))  
 (3)「もしかしたら地上においた霜なのかと疑われるほどである。」(李白の詩「靜夜思」)「疑ふらく」の「らく」は、完了・存続の助動詞「り」の未然形に準体助詞「く」が接続したもの。「―したごと」「―していること」の意。  
 ② 返り点の原則に従う。二点が先か上下点か先かなどと考える必要はなく、「二」は「一」の次、「下」は「上」の次という原則に従うことだけが訓読に必要なこと。返り点をつけることはどこからどこへ戻るときにどの点を使うかがポイント。レ点の場合はレ点一つで一文字返ること、二二点の場合は二文字以上返ること、上下点はいだに二二点が必要入ること、などに注意。  
 (1・2) レ点を使う。  
 (3) レ点と二二点を使う。  
 (4) ③から④へは二二点で返る。  
 (5) ③・④から⑤へは二二点で返る。⑥・⑦から⑧へは上下点で返る。  
 (6) ①から②・③へ返るには、②と③を熟語棒でつなぎ、二二点で返る。④から⑤へは上下点で返る。  
 (7) ③と④の間にレ点を使い、二二点を「三」まで使って⑤・⑥と返る。  
 ④ (1)「若い者は老いやすく(年月はすぐに過ぎてしまふが)学問はなかなか成就しないものだ。」(朱熹の詩「偶成」)若い学生を戒める名言。「易」「難」は返読文字(第3日参照)。一文字返るのでレ点を使う。  
 (2)「人に知られない善行を積んだ者には必ず天が幸福を授けてくれるものだ。」(劉安「淮南子」人間訓)「有」は返読文字。二文字離れて返るので二二点を使う。  
 (3)「虎の樗穴の中に入らなければ虎の子供は手に入られない。」(范曄「後漢書」

学習のポイント解説

漢文は中国の古典なので、本来は訓点などはない。これを白文という。教科書や参考書などでは、漢字の横にひらがなでふりがなをつけることがあるが、これは訓点ではない。

送りがない 送りがないは教科書や参考書によって異なるつけ方をすることがある。「以・以」も「亦・亦」「豈・豈」「用・用」などがその例である。また、「益・益」「各・各」の「々」は「踊り字」といい、使われないこともある。ワ行のひらがな「る」はそれぞれかたかなでは「ル・エ」と表記することに注意。

返り点 熟語を示す「一」を「熟語棒」と呼ぶこともある。一般に熟語棒は二二点や上下点などに従い下から返って読む熟語を示す場合に用いられる。熟語が三字・四字の場合は次のように返り点をつける。

熟語が三字の場合 ②③④①

④例 庸知其年之先吾後生於吾乎。(韓愈「師說」)

庸ぞ其の年の吾よりも先後生なるを知らんや。 どうして自分よりも先に生まれたとか後に生まれたとかいうことが問題とならうか。

熟語が四字の場合 ②③④⑤①

④例 未嘗不歎息痛恨於桓靈也。(諸葛亮「出師表」)「未」は再読文字。

第4日参照。

未だ嘗て桓靈に歎息痛恨せずんばあらざるなり。

いままで桓帝と靈帝とを嘆き悲しみ、残念がらなかつたことはない。

甲乙点は、上下点以上に返る必要がある場合や、上下点の「上・中・下」だけでは不足する場合に用い、「甲乙丙丁」などの十干を用いる。

④例 蓋以善漢文者從。(顧山陽「日本外史」)「蓋」は再読文字。第4日参照。

蓋ぞ漢文を善くする者を以て從へざる。

どうして漢文のわかる人物を家臣としないのか。

天地点は、甲乙点以上に返る必要がある場合に用い、「天・地・人」を用いる。

④例 有地悲世俗不察其意而狼。(朱家郭解等「令」)「暴豪之徒」同類、而共笑之者。(司馬遷「史記」游俠列伝)

班超伝)何事も危険を冒さなければ大きな利益はあげられないことを教えた名言。「不」は否定の語で返読文字。「入」「得」に返るには、二文字離れているので二二点。それぞれの「不」に返るには一文字離れているのでレ点。

④「他の山から採取された粗末な石であっても、自分の持っている宝玉を磨いて美しくするのに役立つ。」(詩経「小雅編」鶴鳴)他人の悪いところも自分の反省の材料になることを教えた名言。「可」は返読文字。「攻玉」のところでレ点を使い、二二点で「可」へ返る。

⑤「優れた人物は忍耐強くなければならない。」(論語「泰伯編」)二二点を「三」まで使って「可」まで返り、「不」へはレ点で返る。

⑥「桃やすももは口をきいて人を招くことはないが、(その花や実のために)人々が木の下に集まって自然に小道ができる。」(司馬遷「史記」李將軍列伝)徳のある人物には自然と人が集まることを述べた名言。レ点を使う。

⑦「詩の一編一編が広く世間の評判となる。」(林嵩「周朴詩集序」)「膾炙」は細かく切った生の肉、「炙」は火であぶった肉。「膾炙」は人に喜ばれること、だれもが知っていることをいう。「膾炙」を熟語棒でつなぎ、二二点を使う。

⑧「その(馬の)能力が一日に千里を走るほどであることを(馬を飼う人が)知って養っているのではない。」(韓愈「雜說」)「千里」と「食」のあいだには置き字(第3日参照)の「而」が入るが、ここでは学習の便宜を考えて省略した。「里」から「知」へは二二点、「食」から「不」へは上下点。

⑨「瓜の畑を通った時に(靴が脱げても、靴を直すとその靴の中に瓜を盗んで隠したと疑われるから)靴をはき直さない。すももの木の下では(冠が傾いても、すももを盗んで冠の中に隠したと疑われるから)冠をかぶり直さない。」(古楽府「君子行」)他人に疑われやすい言動は避けなければならないと戒めた名言。「不納履」は、瓜の畑の中に靴をはいて入らない、という解釈もある。レ点を二つずつ組み合わせて使う。

⑩「私は燕の国が小さくて(斉の国に)復讐するほどの力を持っていないことをよく知っている。」(曾先之「十八史略」春秋戰國・燕)「孤」は、諸侯のへりくだった時の自称。「私」の意。「報」から「足」へは二二点を使い、「不」へはレ点で返るが、すぐに「知」へ返るので、レ点を使う。この形では上下点は使われないことに注意。